



原田文孝

はらだ ふみたか / 1956年岡山県生まれ。兵庫県加古川市で肢体不自由養護学校に31年勤める。教員退職後も障害福祉の職場で障害の重い人たちとかがわり続ける。NPO法人ささゆり会代表

私に

人生と

言えるものが

あるなら



第6回 人生を再発見する

NPO法人を設立へ

遠山さんは、養護学校を卒業後、片道1時間ぐらいかかる遠くの施設や病院の生活介護を利用していました。近くの事業所は看護師のいる日しか利用できなかった。施設や病院の生活介護では、人工呼吸器をつけていることで、ずっとベッドで過ごし、随意的な活動が制約されているので療育の活動にほとんど参加できませんでした。特に、からだを動かす活動はなかったようです。家庭での介護で一番難しい入浴は、事業所で週に1〜2回と訪問入浴で週に1〜2回でした。

遠山さんのお母さんたちと20年以上続いていた親の会で「もつと近くに事業所があったらいいのに」「入浴を楽しみ、いろんな活動ができる事業所をつくりたい」というねがいを実現しようと、NPO法人を設立し、生活介護と放課後等デイサービスの事業所「さち」をつくりました。後に居宅介護や移動支援の「エール」も始めました。

「まち」での実践の構想

私は、まず、「さち」での生活介護の実践の構想を考えました。テーマは「人

生再発見」です。①障害の重い人の生活

はどのような状態で、どんな悩みやねがいがあのかを知る。②憲法25条の権利としての「健康で文化的な」生活の視点から、障害の重い人の生活を見つめ直し、生活の意味を問い直す。「健康」は「身体的・心理的・社会的に完全に良い状態」(WHO)ととらえるのではなく、「疾患があっても、さまざまな薬や補装具や機器、医療や介護の力などを支えにして、症状を和らげ、気落ちすることなく人生を前向きに歩いていける力」(松田純、2018)と考え、生活の楽しみを再発見し、生活を楽しむ工夫をする。③学校卒業後は、日々の暮らしを楽しみ、暮らしを豊かにしていく方向に重点が移っていく。それは、価値観の転換であり、生活を楽しむことの価値を深めていくことである。④社会参加の一つとして経済活動にも参加する。共同作業で仕事を楽しむ、消費活動も楽しむ。

生活を楽しむ実践として、まず、おしゃれな服に着替えて外出をしたり、ブランコやスケートボードでの坂滑りなどの中からだを動かす活動をしたり、浴槽を外に移動して露天風呂に入ったりしました。生活を楽しむ活動をしなが

を考えていきました。

まかないづくりでやる気満々

まず始めたのは、「さち」の職員のお昼ごはんのまかないづくりです。料理長、遠山さん、職員2人が台所に集まります。遠山さんは、料理づくりの助手として働きます。スマートフォンで今日作る料理の作り方の映像を一緒に見ます。目標としての作る料理とその手順を共通理解してから作り始めます。

記録から様子を紹介します。「料理長から、遠山さんの仕事が伝えられる。包丁でナス・ピーマン・かぼちゃと一緒に切る。その後、白和えをつくる。豆腐と一緒に切り、卵も割る。盛り付けも一緒にする。ずっと集中して1時間以上やる。終わってから、目をグルグル動かして『もつとしたい』と要求していた。やる気満々だった。和室に移動して、一緒に昼食を食べた。」遠山さんが包丁で野菜を切るときは、包丁を握った遠山さんの手を私が持ち、ストレッチャーに寝ている遠山さんが見えるように野菜を空中に持ち上げて切ります。私たちは「空中切り」と呼んでいます。

遠山さんと一緒にスイーツをつくる券

遠山さんのまかないづくりの仕事に参加した私は、遠山さんがやる気満々で楽しんでしているだけでなく、一緒にしている私たち職員がとっても楽しかったことを実感したのです。これは遠山さんの活動の介助をしているということではなく、一緒に料理を作っているという共同作業であると思いました。

そこで、遠山さんを知る人たちに遠山さんと一緒に料理を作ることの楽しさを体験してほしいと考え、遠山さんには一緒に料理を作ること仕事をとしてほしいと依頼し、「遠山さんと一緒にスイーツをつくる券」を発売しました。さつそく券を購入した2人が来てくれました。「朝の会で『今日はスイーツづくりの仕事がありますよ』と話す、やる気で目をグルグル動かしていた。スイーツは水ようかんだった。まず、スマートフォンでつくり方をみんなで確認する。寒天を溶かした鍋の中に、遠山さんとAさんが砂糖を測りながら入れていく。こぼれそうになって『ワア〜』と大きな声を出す。2人で味見をして確認する。次は、Bさんと一緒にあんこを量って鍋に